# フォックス・ホール

## 真夜中にただひとり

アイバン・サウスオール
久　米　穣　訳

商標登録番号 第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋 フォックス・ホール —真夜中にただひとり—

昭和52年9月30日 初版発行 ¥980

訳者 久米穣

発行者 竹下晴信

印刷所 三倉印刷
製本所 株式会社小林製本

発行所 株式会社 評論社
(〒101) 東京都千代田区神田神保町2—16
電話代表 (265)1961
振替東京 8—7294

<検印省略>

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。 (A-1)

# フォックス・ホール——真夜中にただひとり

アイバン・サウスオール作　久米穣訳

# THE FOX HOLE

by

Ivan Southall

Original English language edition published
by Methuen & Co., Ltd., London.
© 1967 by Ivan Southall
Japanese translation rights arranged with
Associated Book Publishers Ltd., London
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

# もくじ


1 ケンの来た夜 —— 7

2 メンフクロウが鳴く時 —— 21

3 例の絵本 —— 32

4 キツネを追って —— 44

5 穴 —— 61

6 おりの中 —— 79

7 ただ、もうれつに —— 90

8 あと四フィート —— 100

9 やぶれた天井 —— 117

あとがき —— 133


さし絵：イアン・リボンズ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# フォックス・ホール——真夜中にただひとり

# 1 ケンの来た夜

あとからそのことを考えると、思い起こすたびに奇妙に少しふるえを感じるのだったが、ヒューは、それがどのようにして始まったか、たしかな記憶はなかった。

じつのところ、ヒューは何ごとにせよ、真剣に考えたことなどなかった。かれは、思い通りのことをやるタイプの少年だった――良いことも、悪いことも――それも行きがかりじょう。もし、木を伐り倒したいと思うと、頼まれたものだろうとなかろうと、伐り倒してしまった。授業中でも、話がしたいと思った時には遠慮などしなかった。朝の四時に起きたいと思えば、四時に起きた。けんかをしたくなると、よくそうしたものだが、一番近くにいるものを相手にえらんだ。（これと同じ理由で、かれはチャーリー・ベアードに自信ありげにいった。「こわいかって？　おれが？　ドブにおねんねするのはおまえの方だってことよ」）両親にいわせれば、ヒューは、ずんぐりしてがんじょうな、シシ鼻の問題児で

あった。かれは、頭を働かそうとはしなかった。「頭を働かすんだ、頭を！　頭を！」父親は口うるさくいったものだ。

だが、今回は事情がちがった。今回は、ヒューがガラスを割ったとか、ヒューが木から落ちたとか、ヒューが妹たちのベッドにイモムシを入れたなどということではなかった。今回はみんな――家族全員――が巻きこまれていたのだ、ヒュー、ジョーン、フランシー、ママ、パパ、それにケンも。

ある事が起こり、驚きと興奮とゴタゴタが続いた。大人たちは奇妙な行動を始めた。ママとパパは気むずかしかった。パパは、最初、目を大きく見開いたまま、気絶せんばかりだったが、それから、頭のちょっとおかしい人のようにわらった。しかし、しばらくして緊張していらいらしだし、時々変な調子でママをながめ、ママは少女のように、神経質なくすくすわらいをした。

事の起こりの震源地はいくつもあったようだ。ケンだったかもしれない、ケンの来た夜のことだ（実際、それはまぎれもない事実だ）。かわいそうなケン。メンフクロウのせいだったかもしれない。あの本のせいだったかもしれない。キツネのせいだったかもしれない。それとも、これら四つがいっしょくたになってひき起こして、それに他のさまざまのことが重なったのか。

その日がやってくるのをただ待っているカレンダーの日付けのように、その珍事は、いつでも起こるのを待っていただけかもしれなかった。何年も何年も、ただただ起こるのを待っていたのだ。まるで、高い絶壁のぎりぎりの端にはりついた巨大な漂石が、今にも落下するのを待ちかまえているように、あ

るいは招かれざる客がドアを、何度も何度もノックしつづけて、今か今かと、ドアが開かれるのを待ちうけているかのように。五十年、六十年、七十年か八十年も、じっと待ちつづけていたのであろう。何年間も、子どもたちは、小峡谷（むかし川床だったが、今は干あがって大雨の時だけ排水路の役をつとめる）の中が何かおかしいと、気づいていたのだ。が、八十年間、何ごとも起こらずにすんできたのだ。

「八十年間ってどのくらい、パパ？」

「長い間さ、ヒュー」

「そうだね。でも、どのくらい長いのさ？」

「さあね。パパよりずっと年とった人に聞かなくちゃ、わからないさ」

ヒューは、それをよく考えてみた。かれは、父親のいう意味がわかるような気がした。八十年間生きてみなければ、その長さが、ほんとうにはわからないものだ。「パパ、何歳？」

パパはにっこりし、家中がまた元に戻ったようであった。パパは、ここ何日も、あんな風ににっこりしたことはなかった。その珍事が起こっているあいだ中、パパはまるで見も知らぬ他人のようであり、その後の数日間もまた、パパの状態に変わりはなかった。

しかし、ヒューが本気で考え始めた頃には、珍事もおさまっていたし、ケンもまた去っていた。

ケンの来た夜は、週末にかかる連休の金曜日で、スーツケースや雑のうを持った人たちが、軽い食事



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をとりに家へ帰るビジネス・マンや、秘書や店員などとごっちゃになって、ヒルズ鉄道に乗っていた。

そのむしむしする、混雑したやかましい汽車は、ケンにとって、まったく新しい経験であった。乗客はといえば、一日の仕事で疲れて、新聞や雑誌を読んだり、もう少しでくずれ落ちそうなかっこうで居眠りしている大人たちとか、買い物の包みに、すっかり埋まりながら町からわが家に帰ろうとする遅出の買物客や、住民のまばらな奥地で、つらい原始生活に挑戦するための服装に身をかためた、そうぞうしい若者たちのグループとか、キャンプ・ファイヤーの歌を歌うボーイ・スカウトの団体――それにケンであった。連休前夜のメルボルン五時十分発の、やたらとゆれるやかましい汽車の中で、ケンはまったくおとなしく、しばらくは神経をとがらせていた。

ケンは、二人の大男の間のわずかな座席の空間に、かろうじて腰をおろしていた。荷物棚はぎっしりだったので、重いスーツケースをしっかりとにぎっていた。たいへんきゅうくつだったので苦しかったし、あつかったので汗もかいているし、タバコの煙で目が痛かった。

ケンは興奮していた。むりもない。ケンはこれまでに、一人で汽車に乗ったことなどなかったからだ。ただ、あったとしても、それは学校に行くとか、母親からたのまれて地元の店に買物に行くとか近所に遊びに行くとか、スポーツをしに行くとかぐらいのものであった。かれが長いこと胸に描いていたのは――この週末が近づいてくると特にそうだったが――自分以外は誰も乗っていないガラガラの車内風景であった。それで、窓ぎわに陣どって、駅の数や踏切りの回数を数えたり、牛や馬をながめたり、

ヒューやジョーンの住む丘の方めざして走る汽車のガタゴトガタゴトいう音に耳をすますことをたのしみにしていた。しかし、勝手がちがった。

人間も多すぎるし、音もうるさすぎたので、かれには、新聞や大人の広い背中をぬって、ところどころ、ちらりとかい間見る以外、何も見えなかった。時々乗客が降りたが、それ以上に乗ってきた。人の足やひじや、大振りの雑のうに押されたり、打たれたりした。足は踏んづけられた。まっ赤になった顔は、スーツケースの端に囲まれていた。髪の毛は、荷物や大人の服の袖でくしゃくしゃになっていた。それにかれは、自分のスーツケースが非常に重かったので、ますます苦痛を感じてきていた。かれの生涯の中でまさに最も長い一時間であった。

終点のベルグレイブで、川の水がさっと一掃するように、その列車から乗客がどっと流れ出た。ケンもその勢いで押し出され、泣きたいくらいだった。両足を地面につけることも足の踏み場を見つけることも、スーツケースを引きずっていくこともむずかしかった。あげくのはては、バスを見つけることができるだろうという淡い希望をもつことだけをたよりに長い急斜道を、木のように背の高い人たちに取りかこまれ、もまれつつうまく前に進むことは、たいへんなことだった。出発前には夢にも予想していなかったことだった。

母がバスの乗場を教えてくれていたのだが、かれはもはや、考えることも、思い出すこともできず、悲しげな声で、「モンバルク行きのバスはどこから出るんですか？」と聞いてみたものの、だれにも聞

こえなかったようであった。体が大きくていそがしい人たちは、みな、自分たちのバスの方に急いでいるようであった。一人の少年が迷子になろうが、おびえていようが、あるいは足に踏みつぶされようが、みんな知っちゃいないというようであった。ケンは心細かった。これまでケンはこんなに心細いと思ったことは一度もなかった。

「モンバルクに行きたいんだね？」一声かかってきた。

声の主は身をかがめ、かれのわきをせかせかと歩いてきたが、あやふやな感じの大男だった。

「ええ、そうなんです。どこですか？」

「そんなら、ついておいで」

そのあやふやな感じの大男について行くのに、ケンはつまずき、見失いはしないかと心配だった。というのも、ケンがそのスーツケースを引きずっていくことは、錨を引いて歩くのと同じようなものだったからである。

男が振りかえった。「さあ、きみ、おいで」

その男が待っていてくれたことから推察すると、ケンはこの世の終りみたいな顔をしていたのにちがいない。

「何、持ってるんだね？」男が聞いた。「レンガかい？」それから男は、かれからスーツケースを、軽々と受けとると、大またでどんどん歩き始めた。ケンは、「ありがとう。ありがとうございます。ど

うもすみません」といって、走るようにして後をついていった。

男は、それが聞こえなかったのか、返事もせず、ただ大またに歩き続けて、斜道のてっぺんまで来ると、反対側の方に降り始めた。

「あれがきみの乗るバスだ」男がいった。「あいつだよ」そして急に、ケンはふたたび一人きりになった。あるのは錨のように重いスーツケースと、大きな赤いバスを待つ長い行列で押し合う人波だった。かれはもう少しで泣きだしそうになったので、涙があふれてくるのでは、と気が気ではなかった。かれは一人の汽車旅の冒険を楽しみにしていたのだ。自家用車で行くかわりに、一人でどっかに行き、大人なみに自分でお金を払って切符を買い、これからもまた母親に許可してもらえるように、何でも完璧に自分でやることを楽しみにしていたのだ。それは、キャスおばさんとボブおじさんといとこたちとの、丘での楽しみが目当てなのだ。その丘での生活の、ほんの一ときでも、めちゃめちゃにするような、ほんのささいなこともごめんだと思っていた。

後から押されながら、かれはいまいましいスーツケースを引きずって、バスの高いステップをやっとのことでのぼった。上には運転手がすわっていて、暑さで赤い顔をして、料金を、と手をのばした。

「どこまで？」自分の運転するバスの行先を知っていないかのように、運転手がたずねた。

「モンバルク」ケンはびっくりしていった。「でしょ？　このバス？　モンバルク行ですね？」

「十セント」

ケンは、母からあずかった財布が見つからなかった。

「さあ、さあ、坊や、十セント出しな」

運転手の顔が近づいてだんだん大きくなり、いっそう赤くなっておびやかすかと思ったが、そうはならなかった。ケンの思い過ごしだった。

「バス代はあるのか、ないのか？」

ケンは、はげしくうなずき、ポケットというポケットを必死にさぐった。

「いいから車内にはいって」運転手がいった。「ずっと後ろの方に行ってくれ。降りる時に払うんだ。荷物はあの棚の後ろに置いてな。通路のじゃまにならんようにだぞ。さあ、行った行った！　誰か、この子の荷物、持ってやってくれ。そして、あそこにほうってやってくれ」

ケンはすすり泣いたが、誰の耳にも聞こえなかった。誰もが興奮していてそれが耳にはいらなかったか、家に帰ることで頭が一ぱいだったか、または席の奪い合いで、それどころではなかったかのどれかだったのだ。もうすぐ六時半だ。これが今日の最終バスである。みんながたがいに押し合うさまといったら、それはすさまじいものであった。

ケンも、つまずきながらバスの後方に行ったが、席はもう残っておらず、立っていなければならなかった。かれは、財布がないかとポケットをくまなく探し、気は滅入り、がっくりして体はふるえてい



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com